日本語教育指導参考書 1

# 音声と音声教育

文化庁

日本語教育指導参考書　1

# 音声と音声教育

文　化　庁

日本語教育指導参考書1

音声と音声教育

昭和46年7月10日　初版発行
昭和54年9月5日　8刷発行

定価 620円

著作権所有　文化庁
郵便番号 100
東京都千代田区霞が関3の2の2
(581) 4211

発行　大蔵省印刷局
郵便番号 107
東京都港区虎ノ門2－2－4
(582) 4411

落丁、乱丁はおとりかえします。

**政府刊行物普及販売所**

官報・政府刊行物のご相談、ご注文は下記普及販売所をご利用下さい。

**◎政府刊行物サービス・センター**

| | | |
|---|---|---|
| 霞が関 | 東京都千代田区霞が関1の2（農林省別館前） | (郵)100(電)東　京(504)3885(代) |
| 大手町 | 東京都千代田区大手町1の3（大手町合同庁舎第2号館） | (郵)100(電)東　京(211)7786(代) |
| 大　阪 | 大阪市東区大手前之町（大阪合同庁舎第3号館） | (郵)540(電)大　阪(942)1681・1682 |
| 名古屋 | 名古屋市中区三の丸2の5（名古屋合同庁舎第2号館） | (郵)460(電)名古屋(951)9205・9341 |
| 福　岡 | 福岡市博多区博多駅東2の11（福岡合同庁舎） | (郵)812(電)福　岡(411)6201・6204 |
| 札　幌 | 札幌市中央区北三条西4丁目（第1合同庁舎構内） | (郵)060(電)札　幌(231)7211・7213 |
| 広　島 | 広島市上八丁堀6番30号（広島合同庁舎第2号館） | (郵)730(電)広　島(22) 6012・6013 |
| 仙　台 | 仙台市本町3丁目2の23（仙台第2合同庁舎） | (郵)980(電)仙　台(61) 8320・8321 |

各都道府県庁所在地の

**◎政府刊行物サービス・ステーション**（官報販売所）

# ま　え　が　き

「外国人のための日本語教育指導参考書」は，外国人に対する日本語教育に携わっている人々を対象として，その基礎的知識を確実にし，あわせて，指導上の参考に供するために編集・刊行するものである。

この参考書は，シリーズ形式として，昭和44年度から順次刊行の予定で，その第1冊として「音声と音声教育」を取り上げ，音声に関する基礎的知識，および，音声教育に関する基本的技術について，具体的に述べたものである。

この本は，この方面で豊かな学識・経験をおもちの水谷　修氏（アメリカ・カナダ十二大学連合日本研究センターの語学課程主任），および，大坪一夫氏（同センターの専任講師）に執筆を依頼したものである。

日本語教育に携わるかたがた，また，それを志すかたがたが，この指導参考書を大いに活用し，日常の指導に，より効果を上げることができるよう，また，この分野での研究がさらに充実し，発展することを期待するものである。

昭和45年3月20日

文化庁文化部国語課長

国　松　治　男

# はじめに

意識的に学びとったことは他人に伝えやすいが，無意識に習得したものを人に伝えることはむずかしい。その意味で，日本人が日本語を教えることは，英語などの外国語を教えるよりもむずかしいものである。しかも，言語の諸要素の中でも音声面は，最も無意識に習得されるものであるから音声面の日本語教授となるとそのむずかしさもいっそうである。発音指導の教材や発音教育についての適切な指導書が現われないのは発音なんか自然にうまくなるとか，少しぐらい発音が悪くてもかまわないというような発音に対する安易な考え方のせいだけではなく，日常意識して使うことの少ない音声の問題を客観的にとらえて学習の素材とすることのむずかしさにも原因があるのであろう。

日本語を外国語として外国人に教える立場に立ったとき，教師が幾度正しい発音をくり返して聞かせても，学生がなかなか正しく発音してくれるようにならないということは多くの人が経験するところである。外国人に対する日本語教育に限られたことではなく，日本人に対する国語教育についても，文字や語法に関する教育のことになると議論も紛糾するが，発音となると関心が少なく，まれにあっても見当違いの発言が多いというのも前述の理由によるのであろう。

音声は言語の基本であるといわれる。音声面を無視して正しい日本語を論ずるのは無意味であるといわなければなるまい。日本語の教師の日本語は，日本語として最も美しく正しいものでなければならない。そしてまた一つ一つの発音について,それがどのようにして発音されるものであり,学生の発音のしかたがどうまちがっており，だからどう直すべきだと明確に指摘できなければならない。また，教室内で矯正(きょう)ができるだけでなく，学生が練習するための教材を準備し，学習結果測定のためのテキストを作成するなど，教育指導活動に必要な能力をもあわせ持たなければならない。これらの条件を満たす最小限の知識と技術を身につけることは日本語教師としての責任であろう。

この本は，その必要を痛感する一教師の立場から，さきに述べた音声教育の困難さをじゅうぶん自覚しつつ書き上げたものである。学習の手がかりになるよう，少しでも役にたつようにと努力を尽くしたが，決して満足できるできばえではない。練習に重点を置いたため，理論の説明に親切を欠いたところがあったり，触れたほうが望ましいと思われる内容を割愛してしまったのは残念であるが，日本語教育の専門家になろうとする人の日本語音声への入門書として必ずや寄与するところがあると信じて，あえてこの指導書を世に出したいと願うものである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

このテキストができあがるまでには3年の日時と多くのかたがたのお力添えをいただいた。それにもかかわらず不備な点を数多く残しているであろうと思うとそれらのかたがたに対して申しわけのことばもない。せめて，それらのかたがたや，この本をお使いになるであろうかたがたからのおしかりをいただき，これからの勉強の力づけにさせていただけたらと思う。

## 本書の構成と取り扱い

このテキストを作るにあたってわれわれがその対象として想定した学習者は，まず，これから日本語教育に携わろうという人たち，教え始めたばかりの人たちである。その人たちのうちでも経験のない人たちが対象である。それゆえに音声学的訓練や教育を受けた人たちにとっては不要のことが数多く含まれている。その人たちはどんどんとばして学習を進めてよい。またその人たちにとって，このテキストに使われている用語，記号などが学習したものと異なっていることがあるであろうが，混乱することのないようにしていただきたい。記号の使い方や用語の種類はいろいろある。

このテキストでわれわれが「日本語」といっているのは東京語をさしているのであるが，いちいち文中で断わらなかった。ただ学習者が東京出身者である場合と，東京以外の地方の出身者の場合には問題となることが異なってくることが予想されるので，その点については留意して学習を進めていただきたい。どこまで日本語の音声について習得すればよいかということも，その立場によって異なるわけで，たとえばアクセントについていえば，東京出身者は自分のアクセントの意識的な分析によって，法則性の把握(はあく)ができるようになるべきであるし，地方の出身者の場合は一つの外国語として学び取ってしまわなければならないであろう。

このテキストは，説明書でもなければ，テストでもない。音声学や言語学の基礎知識のない人でも，確実に学習ができるように学ぶべき素材を整理し，プログラム化したものである。順を追って学習を進めていけば，だれでも必ず音声に関する基本的な知識が身につくように練習問題を多くした。そのため，ときには，くどいくらいくり返してあることがある。きちんと身につくようにとの配慮からなので，そのような部分は各自が自身の速度でどんどん進んでいってよい。

テキストは説明と設問が連続して出ており，学習者は，それを読んで設問中

の空白部分に答えをいれたり，幾つかの答えの中から正しいのを選んだりして学習を進めるわけだが，一つ一つの質問に対しては，次の設問の左側の欄に正答が示してあるので，一つ一つ正しい答えを考えたかどうかを確認しながら次へ進んでいくことができる。

使い方を確認するために，第1ページを開いてみよう。第1部，その1：「われわれが一つと感じている単位と，それをさらに分解した単位について」のところである。0．の記号のあと，この章の学習目的について述べており，そのあと，1．の記号に続いて設問文がある。そしてその中の3行目に，「……書き表わすと『____』となる。」とある。この「____」のところに答えを書き込むわけだが，書き込んだあと，2.の記号の左側欄にある正答を見て，自分の答えが正しかったかどうかを確認するわけである。この正答は「はは」である。まちがっていたらもう一度説明を読んでみよう。正答の部分はあらかじめ手でおおうなり紙片でかくすなりしておけばよいであろう。

この学習の途中，特にお願いしたいことは，問題として取り上げてあることは必ず声に出して確認していっていただきたいということである。「ピン」ということばが問題になっていれば，口の中で「ピン」,「ピン」とくり返して，書いてある事実と自分のしていることが一致していることを確認しながらやってほしい。「舌の先が歯茎についている。」とあったら鏡を使うなり指で調べてみるなりして，学習していくのである。

このテキストでは自習書としての性格を完ぺきにするために，必要最低限の部分の録音テープも用意した。本文中にテープを聞いて答えを書け，という指示のあるところでは，テープを使っていただきたい。

このテキストは7部からできている。各部の目的は，それぞれの最初に書いてあるとおりであるが，全体の目的をおおまかに述べておく。

第1部では，日本語の子音を例に，子音について話すことばが使えるようになる練習をする。音について意識的に考え，観察し，話すことができるようになれば，それで第1部の目的は果たされたことになる。

第2部では，われわれが，日本語の音について持っているイメージと，それを基礎にして行なう実際の行動の間には，かなりの違いがあることを理解し，その違いが，どういうわけで起こるかを調べてみる。音の意識的選択，無意識的な選択というのが何を意味するのかが理解できれば，第2部の目的は達せられたことになる。

第3部では，第1部，第2部で理解したことを基礎にして，日本語のすべて

の音について，われわれが持っているイメージと実際の行動の間にある違いが意識できるようになることが目的である。時間と紙数のつごうで，完全を期することはできない。将来，自分で反省するときに，あまり苦労しないで済む程度に規則の意味が理解できるようになっていればじゅうぶんである。

第4部は日本語のアクセントの紹介である。東京人であり，外国人などに対してあなたのアクセントは違っていると指摘することはできても，ここを高く，ここを低く言いなさい，と説明できる人は少ない。東京人は，ここに用意された，限られたものではあるが，教材によって自分のもっているアクセントの様相を意識的につかむことができるようにしてほしい。学生に与えなければならないのは個々のアクセントだけではなく，アクセント全体の傾向や法則性もたいせつなのだから。東京以外の出身者には練習問題が東京語アクセントの習得に役だつはずである。

第5部は，学生のまちがいの理由を解釈するにはどんなことを考えたらよいかが理解できるようになることが目的である。学生がまちがえるのにはいろいろの理由がある。第5部では言語を比較してみて，その結果ありうる幾つかの場合を考えてみる。最終的には学生のまちがいの原因を完全に理解し，その学生にも適切な注意を与えられるようになることが，次の第6部も含めて全体の目的である。

第6部は音声教育上の諸問題について過去の研究報告やわれわれの経験の中から教授上の参考になりそうなことを事典のように列挙したものであり，時に応じて，あるいは問題に直面したときに何かのヒントにでもなれば幸いである。

なお巻末には，使用の便を考えて参考文献表と索引をつけた。

# 音声と音声教育

# 目　　次

はじめに

第1部：その1：われわれが一つと感じている単位と，
それをさらに分解した単位について…… 1

その2：音声について話すためのことば…… 6

第2部：われわれが日本語の音について持っている意識と，
実際の調音行動とのずれについて ― 音素論の簡単な紹介…… 21

第3部：日本語の音素とその異音…… 36

第4部：日本語のアクセント…… 56

第5部：二つの言語が接触するとき何が起きるか…… 161

第6部：音声教育上の諸問題…… 182

参考文献…… 229

索引…… 231

# 第1部　その1：われわれが一つと感じている単位と，それをさらに分解した単位について

0．　私たちはかな1字で表わされる単位をもうこれ以上分解できない単位であると意識している。しかし，実際は，もっと分解することができるのだということを確かめ，どのような要素から，かな1文字の単位ができているのかということを理解することが第1部その1の目的である。

1．　日本語は，書こうとすれば，全部かな文字で書き表わすことができる。たとえば「母」という意味の単語は，ひらがなで書き表わすと「____」となる。

はは　2．　「父」という意味の単語は，ひらがなで「____」と書き表わす。

ちち　3．　「はは」，「ちち」という文字を読むのに，一つ一つの文字にかかる時間の長さは……（a．ほとんど同じである　b．全然違う）。

a．　4．　「はは」という単語を声を出して読むのにかかる時間は，「は」（歯）という単語を声を出して読むのにかかる時間のおよそ____倍である。

2．　5．　一般に，日本語のかな1文字はどれも……（a．ほとんど同じ　b．全然違う　）長さの時間で発音される音の単位を表わすのに用いられる。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

a．

6．　ほとんど同じ時間で発音される音の単位を音節*と呼ぶことにしよう。「は」という文字は一つの＿＿を表わすのに用いられる。

音節

7．　「ち」という文字も，一つの＿＿を表わすのに用いられる。「は」という文字も「ち」という文字も，それぞれを発音するのにかかる時間はほとんど同じである。

音節

8．　「はは」のように，音節が二つ並んでその形が表わされる単語を2音節語という。「歯」は＿＿音節語である。また「母方」は＿＿音節語である。

1／4

9．　「著者」という単語は＿＿音節語である。

2．

10．　「著者」という意味の単語は「ちょしゃ」と、かな4文字で表わすが，これを4音節語とはいわない。「は」という文字を発音するのにかかる時間と，「ちょ」，「しゃ」という文字連続を発音するのにかかる時間は……（a．ほとんど同じである　b．全然違う）ということからもわかるだろう。

a．

11．　「著者」は＿＿音節語である。「挙手」は何音節語か。＿＿＿＿＿

2／2音節語

12．　「きゃ，きゅ，きょ，しゃ，しゅ，しょ……」などは，2字集まって一つの音節を表わしている。このように小さな「ゃ，ゅ，ょ」と他の大きな文字が集まっ

---

＊　拍，モーラ等の用語を使うことがある。

て表わされる音節以外は，すべて一つの音節は，かな1文字で表わされる。「少々」は何音節語か。_____

4音節語

13.　われわれは，普通，かな1文字で表わされた単位は，これ以上分解できないと感じている。しかし，たとえば，「ぱ」という文字と「ま」という文字を長くのばして発音してみると，のばした部分は……（a.同じである　b．違う　）ことに気がつくだろう。

a．

14.　「ぴ」と「み」を長くのばして発音してみるとどうか。同じ部分はあるだろうか。……（a．ある　b．ない）。

a．

15.　「ぱ」と「ま」を長くのばして発音したときに，同じだった部分の音をひらがなで表わすと「___」と表わせる。

あ

16.　「ぽ」と「も」も長くのばして発音したときに，同じだった部分の音をひらがなで表わすと「___」と表わせる。

お

17.　「ぱ」と「ま」で表わされる音節を比べてみると，この二つは共通の部分を持つことがわかる。

　しかし，「ぱ」と「ま」は別々の音節を表わしているのだから，「ぱ」と「ま」には……（a.共通な　b．共通でない）部分もあることがわかる。

b．

18.　「さ」と「ま」で表わされる音節の共通部分，つまり「___」の始まる前の部分は長くのばして発音できるだろうか。（a．できる　b．できない）。

あ／a

19.　「そ」と「も」で表わされる音節の共通部分，「＿＿」の始まる前の部分は長くのばして発音……（a．できる　b．できない）。

お／a

20.　日本語を書き表わすためのひらがな，かたかななどは，「さ」，「ま」などの音節の共通部分を表わす文字を……（a．持っている　b．持っていない）。しかし，共通でない部分を表わす文字は……（a．持っている　b．持っていない）。

a／b

21.　「さ」はローマ字では「sa」と表わし，「ま」は「ma」と表わす。「さ」，「ま」の共通部分は「＿＿」で，共通でない部分は，それぞれ「＿＿」，「＿＿」で表わされている。

a／s／m

22.　つまり，「さ」，「ま」などは，さらにs，m，aなどに分解できることがわかる。「そ」，「も」は＿，＿，＿という三つの文字で表わされる要素でできていることもわかる。

s／m／o

23.「さ」という音節を作っている二つの要素，ローマ字ではs，aで表わされているような二つの要素を単音と呼ぶことにする。「ま」という音節を作っている二つの単音をローマ字で表わすと＿と＿である。

m／a

24.　さて，以上のことから日本語の音節は，さらにいくつかの単音に分解することができることがわかった。簡単に復習すると，日本語のかな1文字で表わされる単位を「＿＿」といい，音節は，さらに分解すると「＿＿」でできているということがわかる。以下，日

音節／単音

本語の単音について調べていくことにする。

# 第1部　その2：音声について話すためのことば

## 音声学の簡単な紹介

0．「第1部　その2」の目的は，発音について観察するとき，何に気をつけたらよいか。またその結果をどのようなことばで話せばお互いに通じあえるかということを考え，そのことばを身につけることである。

1．　子音は「息あるいは声が，口，鼻，あるいはその両方から外へ出るまでの間に，なにかの障害物でじゃまされて作られる音。」と定義できる。したがって，子音について話す場合には，口などのどの部分が息や声の____になるかということがいえなければならない。

障害物

2．　たとえば「ピン」の最初の子音を発音する場合には，上唇（くちびる）と下唇（くちびる）が息の____となっている。

障害物

3．　上唇（くちびる）と下唇（くちびる）のように発音に関係する器官のうち，あまり動かないほうの器官を調音点という。「ピン」の最初の子音の____は上唇（くちびる）である。（詳しくは14ページ以下を参照。）

調音点

4．　「田」の子音を発音する場合には，上の歯茎と舌先が____の障害物となっている。この子音の____は上の歯茎である。

息／調音点

5．　「実（み）」の子音を発音する場合には，____と____が声の障害物になっている。この子音の____は上唇（くちびる）である。

上唇／下唇／調音点

6．「菜（な）」の子音を発音する場合には，____と____が声の障害物になっている。この子音の____は上の歯茎である。

上の歯茎／舌先／調音点

7．2．と5．の例を比べてみると，「ピン」の最初の子音も，「実」の最初の子音もともに上唇（くちびる）と下唇（くちびる）が息あるいは声の障害物になっていることがわかる。すなわち，この二つの子音の調音点は……（a．同じである　b．違う）。

a．

8．しかし，「実」の子音では，声は____からではなく　鼻からでる。

口

9．「ピン」と「実」の場合には，____は同じである。しかし，発音のしかたが違う。発音のしかたを調音法という。

調音点

10．「ピン」の最初の子音と「実」の子音の_____は同じであるが _____は異なる。

調音点／調音法

11．もう一度「田」と「菜」の子音について調べてみよう。この二つの子音の_____は同じである。

調音点

12．しかし，「田」と「菜」の子音の_____は異なる。

調音法

13．「パン」と「晩」の最初の子音を考えてみよう。この二つの子音は，_____も_____も同じである。

調音点／調音法

14．「パン」と「晩」の子音は，13．のように調音点も調音法も同じである。しかし，この音は明らかに違



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com